

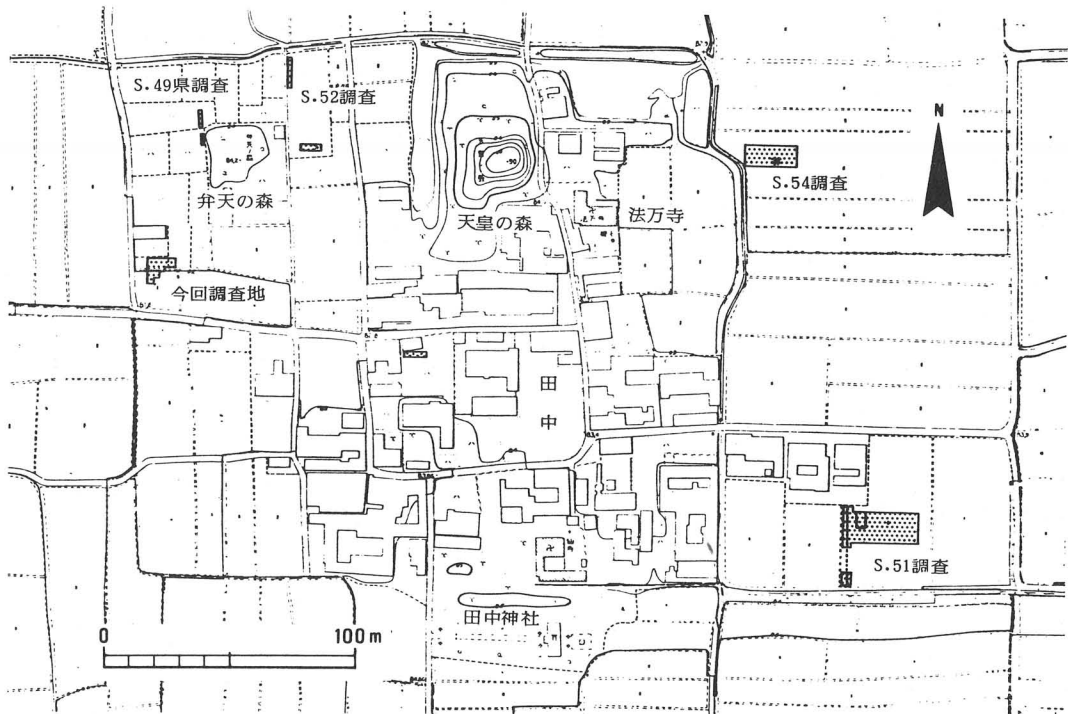
4. 田中宮推定地の調査

(昭和57年9月)

橿原市田中町の集落周辺は、古くから、舒明朝の田中宮跡あるいは田中廃寺と推定されてきた。また、これまでに数次の小規模な調査が実施され、7世紀代の遺構も確認されてきている（位置図参照）。

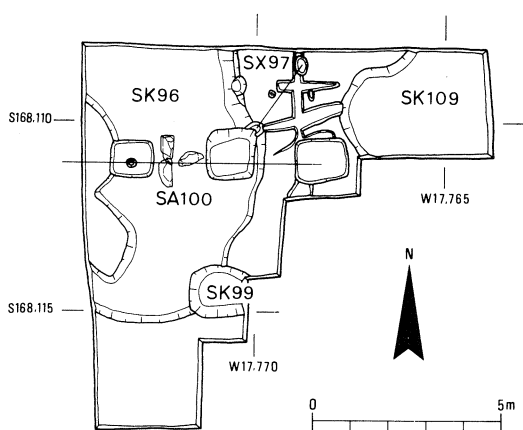
今回の調査は、推定の一つの根拠となっている土壇状の高まり「弁天の森」の西南約40 mにある畑地と水田とで行なった。調査地の層序は、北半の畑地と南半の水田とでやや異なり、北では、耕土・暗灰褐色土・茶褐色砂質土で、南では、耕土・床土・暗茶褐色砂質土・暗灰褐色粘土となっている。遺構は、それぞれ、茶褐色砂質土、暗灰褐色粘土の上面で検出した。検出した遺構は、7世紀代に属する塀・土壇と、その他、中世に属する土壇・溝・ピットなどと分けられる。

遺構 7世紀代の遺構は、その重複関係から、掘立柱塀SA100、土壇SK99とそれらを削平して掘られた土壇SK96とに分かれる。SA100は、調査区中央から



第7図 田中宮推定地周辺調査位置図（1：3000）

西方へのびる東西塀で、2間分を検出した。柱間は2.7 m等間に復原でき、ほぼ真東西をさす。柱掘形は一辺1～1.2 mの隅丸方形を呈し、深さは20 cmである。SK 99は、SA 100の南にある不整形の土塋で、南北1.5 m、東西1.5 m以上、深さ約20 cmの規模をもつ。埋土中から、7世紀初頭の土器が出土した。



第8図 調査遺構配置図(1:200)

調査区の西半にある土塋SK 96は、東西4 m、南北7 m以上の不整形な土塋で、深さ約30 cmである。埋土である暗茶褐色粘質土からは、7世紀初頭～前半代の土器が出土した。

その他、中世ないしはそれ以降に属する遺構として、調査区東半の土塋SK 109や、調査区中央の一辺約30 cmの不整形の柱穴2個で構成されるSX 97などがある。SX 97は、SK 96よりも新しいものの、出土遺物がなく、時期は決めがたい。

出土遺物とまとめ 出土遺物は少ないが、先述した土器類のほかに瓦類がある。瓦類には、田中廃寺出土の1+6の蓮子をもつ単弁8弁蓮華文軒丸瓦と、偏行唐草文軒平瓦(藤原宮6641-E型式)および、丸・平瓦がある。これらの瓦類がいずれも、中世以降の土層から出土し、7世紀代の遺構に含まれていない点は、7世紀代の遺構の性格の一端を示唆するものとして注目される。

今回の調査は、狭小な範囲に限定され、検出した遺構の規模・構造についても、不明な点が多い。しかし、東西塀SA 100は、7世紀前半代に限定される遺構であって、その柱掘形も大きく、ほぼ真東西に営まれるなど、付近に宮殿・官衙に相当する遺構の存在を想定するに十分なものであろう。また、7世紀代の遺構から瓦が出土しない点を考慮すると、これらの遺構が、田中廃寺よりもむしろ、田中宮に密接な関わりをもった遺構とみることができる。今回検出した東西塀SA 100をはじめとする7世紀代の遺構は、昭和50年度に集落の東方で検出した南北塀SA 50、南北棟建物SB 51など(概報6)とともに、田中宮あるいは田中廃寺に推定されるこの地域の遺跡解明の手懸りとなるものである。今後の調査の進展を待ちたい。